

しばらくしてまた着信があった。

「ママはいよいよアナルセックスをしていただくの。若くてたくましいおちんちんで串刺しにされるわ。ママはアナルセックスでご奉仕するアナル奴隷未亡人なのよ」

メールに添付された画像では全裸の母は、犬のように這いくびれた腰を抱かれ、後ろから貫かれていた。きっとお尻の穴に挿入されているのだろう。破廉恥な文章とは裏腹に母はすすり泣きをした辛そうな表情だった。でもその母の美しい顔が辛そうにゆがむ表情にそそられてしまう自分がいた。

二枚目の画像では首輪をした母が突き出された足を舐めていた。舌を出して足を舐める母はまるで犬の扱いだ。その足はなんと爪にカラフルなマニュキアをした女性のものであった。女性の足を舐めながら後ろから腰を抱かれている。性交をされながら犬のように舌を出して女性の足を舐める惨めな姿だった。そのメールの後で母から連絡があった。母の声が携帯から聞こえてくる。

「ママの初めてのアナルセックス、見ていただけたかしら。剛太さんにママはお尻の穴の処女を捧げたのよ。ママにとって記念すべき日なの。これからもママはお尻の穴を調教していただいて、ご主人様たちにアナルセックスでご奉仕するのよ。ねえ、晴男さん、ママがお尻の穴の処女を捧げた記念の日にお祝いの言葉をいただけないかしら。」

母の声に混じってざわめきが聞こえる。複数の女性の声も聞こえる。若い声だ。クラスの女の子たちだろうか。

「ねえ、晴男さん、ママに祝福をください。あなたの祝福がいただけないとママはまた浣腸のお仕置きなの。ママを助けて」

哄笑が聞こえる。何人もの笑い声。肉を打つ音。きっと母はパンキングされながらぼくと話しているのだろう。と

きおり悲鳴が混じる。

「ママ、おめでとう」

ぼくの声に携帯の向こうでどっと沸き立った。

「息子にアナルセックスのお祝いをされた破廉恥ママさんに浣腸のご褒美だぜ。」

剛太の声だった。

「お願い、もう浣腸はゆるして・・・お尻がたまらなく辛い  
の・・・」

母の切実な懇願の声。また肉を打つ音がした。二度三度と聞こえる。

「臀をあげな」

「こうすればいいの？」

その後、母のうめき声が小さく聞こえた。

「お尻の穴が爛れているのに・・・痛くてつらいわ・・・お願い  
です。たくさんは入れないで・・・」

ビシッと肉を打つ音がした。

「浣腸を好きになれって言っただろ！奴隷のくせに弱音を  
はくんじゃねえよ」

母は奴隷にされた。そしてぼくはそんな惨めな母を思って  
股間を固くさせている。

母が帰宅した。3週間ぶりだった。疲れきった表情の母  
は、かえって妖艶さを増した色香がにじみ出ていた。

「ママはなんて破廉恥な女なんだ」

そうじゃない。そんなことを言うつもりはないんだ。ぼく  
の身代わりになって剛太たちの性奴になっている母に慰め  
の言葉をかけてやらなければいけないんだ。それなのに口  
から出た言葉は母を責める言葉ばかりだ。

「アナルセックスまでされて恥ずかしくないのかい。ぼく  
の同級生たちのチンポ奴隷になっているなんて最低だよ。

ママのほうからアナルセックスをお願いしているんだろ」  
母の表情に哀しみの色が満ちていく。

「そ、そんなひどいこと言わないで…決して自分から望んだことではないわ…無理やりにさせられてママは死ぬほどつらいのよ。でも仕方がないじゃない…ママ、どうすればよかったの…」

母は目に涙をためていた。ぼくは悲しみにくれる母をやさしく抱きしめてやらなければいけないんだ。それなのに

「ぼくのチンポにも奉仕してくれよ。あいつらの言いなりになりやがって。ぼくのチンポでお仕置きしてやる」

ズボンと下着を下げてむき出しにした。